

やきもの見聞録(2) 大谷焼(徳島県)

藍甕の里で出会った黄金の壺

熊 博 毅

「青は藍より出でて藍より青し」ということばがある。青色の染料は、タデ科の1年草である藍から取るが、もとの藍の葉より青くなることから、弟子が師よりもすぐれた才能を現すことのたとえとして使われる。その意をつづめて「出藍の誉れ」ともいう。

このことわざのもととなる藍染めは、昔から阿波国(徳島県)の特産品である。そして、その藍染めに使う大型の藍甕を生産してきたのが鳴門の大谷焼であった。



東林院境内の三石甕

大谷焼は200年以上の伝統を持ち、大瓶や睡蓮鉢など、大型陶器の製造に特徴を有する。また、土の温かみを活かした独特の風合いを持つ酒器や、日常使いの素朴なやきものを数多く産し、それを愛する人も多

い。平成15年度(2003)、徳島県では阿波和紙(山川町)、阿波正藍しじら織(徳島市)に次いで3件目となる伝統的工芸品に指定された。

大谷焼のはじまり

安永9年(1780)、豊後国の文右衛門が大谷村山田に立ち寄り、農民たちに土製品の焼成を披露したのがきっかけとなり、山田に瓶窯が築かれたのが大谷焼の始まりと古記録は伝える。

当初、大谷では磁器が焼かれていた。当時は全国的に殖産政策が進展していた時代で、大谷にも藩の役所が設けられ、翌天明元年(1781)から磁器の焼成が開始された。しかし、原料となる陶石や釉薬等が地元では産出せず、九州各地から購入したのに加え、肥前の職人たちを大量に雇い入れて製造したことなどから、結局は採算が取れず、わずか3年で藩窯は廃止された。

磁器から陶器へ

その後、信楽焼の職人から陶器甕の製法を学んだ納田平次兵衛が天明4年(1784)、藩窯の北側に民窯を築き、初めて甕を焼成した。陶土と釉薬を地元の萩原と姫田から調達したため、10年後には利益が出て軌道に乗った。

甕などの日常雑器を中心とした生産であるが、文化3年(1806)には徳島藩の監督下に入れられ、専売制度が始まった。同6年(1809)からは鑑札制度が導入され、製造業者の自由販売が認められるようになった。

近・現代の大谷焼

自営の窯が次々に生まれ、大谷焼が最も活況を呈したのは明治から大正にかけてである。特に大正時代前半は、第一次世界大戦の好景気によって生産量が増大、隆盛をきわめた。

昭和前期には政府の陶磁器統制を受けた時期もあったが、戦後の民芸ブームで大谷焼の生産は再び増加した。

そして静かなやきものの里では、今も7軒の窯元が伝統の甕や鉢、徳利などのほか、食器や花器、美術工芸品などの製作を続けている。

陶祖文右衛門の墓

現在、大谷地区にある四国一番奥之院「八葉山 東林院」の境内の一隅には陶祖文右衛門の墓が祀られている。陶祖の墓所と呼ぶのにふさわしく、中央に立つ「阿波陶祖之碑」をはじめ、脇を固める灯籠などもすべて大谷焼で作られている。



陶祖文右衛門の墓

この墓は昭和45年(1970)5月9日、鳴門市教育委員会によって鳴門市指定史跡に指定され

た。さらに墓所の近くには、大谷焼の窯元の手による藍甕（三石甕）や睡蓮鉢、壺など、いずれも大型の作品が奉納、陳列されている。

金色の壺との出会い

鳴門から大谷へと進み、道路沿いの大型看板にひかれて「陶業会館 梅里窯」に入った。広い店内にはさまざまなやきものが並べられているが、展示棚の一角で午後の日ざしを受け、ひと際きらきら輝く壺を見つけた。「黄金焼締壺^{おうごんやましめつぼ}」である。



陶業会館 梅里窯の展示棚

「理由は分かりませんが、大谷(萩原)の土は、金色が出やすいのです」。梅里窯の代表である女流陶芸家の森悦光さんは、こう語った。以前、全体がこがね色に光り輝く、本当にきれいな作品ができたが、「さすがにそれは手放せず、今も大切に手元に置いています」。

自然は人為を上回る

今から30年ほど前に先代が築いた穴窯は、今も現役。年に一度は火が入れられる。手前の燃焼室と後ろの窯との間に壁があるのが特徴で、ほかではあまり見られない構造だという。



梅里窯の穴窯

焼成には杉と松が使われるが、杉材だけでも5トンにのぼる。大谷の土は柔らかいため、少しずつ温度を上げ、燃焼温度が1100度に達する2日目ころからは窯の外に火が噴き出すようになる。まるで呼吸をするかのように、火が窯の覗き穴から出たり入ったりする光景は、この上もなく幻想的である。

3日に及ぶ焼締めのあとの窯出しは、神のわざを見る瞬間である。薪を使って焼く穴窯では、ときに想像もしない結果が現れる。その人知の及ばないところが、やきものの魅力だと悦光さんは語る。だから窯出しは楽しい、とも。

作品クローズアップ

金彩を施したのではないかと思えるほど華やかな壺。しかし、釉薬は全く使わず、穴窯で焼成された自然釉の作品である。陶土の赤茶色と燻された黒、そして金色のきらめきが、小ぶりの壺の肩から胴にかけて見事な景色を織りなしている。大谷の土が、神の手わざにより穴窯の中で黄金色に姿を変えたとしか思えないほどの艶やかさである。



黄金焼締壺

森悦光さんの子息・裕紀さんは、平成15年(2003)7月31日にテレビ東京で放映された「テレビチャンピオン」の陶芸王選手権で優勝し、初代チャンピオンに輝いた。

「息子は自分のイメージどおりのものを作ろうとしていますが、わたしは土に寄り添い、無理やり自分の形にしようとはしません。作品のイメージは作っているうちに沸いてきますが、無心のときの方が良いものができますね」

自然体のベテラン作家と、新たな意匠を追いかける陶芸家。それぞれの挑戦は今も続いている。